
はばたく翼

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はばたく翼

【Nコード】

N4418R

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

*彼は世界にはばたいた。僕はそれを見る事は出来なかったけど、それが解っただけで充分だ。君はこの世界をどんな目で見るのだろう……『人類の理想』という大きな荷物を背負ったまま君は――生き続けなければならないんだね。

小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

第1章　キメラ

青年はその才能を活かすべく政府の遺伝子研究の部署に勤める事になった。

A国——正式名称アルカヴァリユシア・ルセタ。ヨーロッパにある小国だ。イタリアを思わせる街並みと森が多く、小国ながらもバイオ技術には優れている国である。

25歳になった青年はある日、上司から呼び出しを受けた。

「……」

青年は気を引き締めてノックする。

「入れ」

中から上司の声が聞こえてドアノブに手をかけた。

「失礼します」

40歳過ぎの男が彼の顔を確認すると、無言で彼に何かを手渡した。

「！」

初めに目に飛び込んできたのは【機密文書】という赤い文字。書類の上にそうスタンプが押されてあった。

「マーク・スチュアート。2日後、その施設に視察に行ってもらう」

「……視察ですか？」

マークはいぶかしげに上司の顔を見つめた。

「キメラが誕生してから年に数回、様子を窺いに施設に赴いているが、新たな視点での意見も聞きたいのだね。君が今回から選ばれた」

「『キメラ』？」

その俗物的な名称にマークは怪訝な表情を浮かべる。上司はマークの持っている書類をあごで示し発した。

「そこに今までの事が書かれている。向かいの部屋で読み覚えろ」

ぶっきらぼうに言われてマークは向かいの部屋に足を向ける。

「！」

中には1人ガードがいて、その横には透明の四角いケースがあった。ガードの男はマークを一瞥し無言で視線を外す。

彼もそれに応えず、こぢんまりと置かれたテーブル席に腰掛けた。

*好奇心

「凄い……」

マークはその内容に驚愕した。

「本当に実現していたなんて」

ベルハース教授リーダーのもと、10人の科学者たちが成功させた遺伝子研究。ほぼ現存する全ての人種のヒトDNAを収集し、それを分裂・合成・結合させた人工生命体。

これが世に知らればとんでもない事態になるだろう。生物学的にも人道的にも。

「！ 人の胎内を介していない？ 完全なる人工生物……こんな事って！」

マークは時間も忘れて書類に見入った。

人道的な論点はさておき、遺伝子を研究している者にとって夢にまで見た研究を秘密裏にこの国は行っていた。そして成功している。是非見てみたい……マークは居ても立ってもいられなくなった。

「現在の年齢は9歳。成長速度は常人と同様。回復速度はやや速い。しかし回復力は常人とは著しく異なりかなり優れている。視力、視力は……？ 両目ともに2.0で低下は見られない」

資料には『男性』と書かれているものの外見的特徴は一切、書かれていなかった。情報が外部に漏れる事を懸念した処置なのだろう。

「……ふう」

読み終えたマークは深い溜息を漏らした。そして立ち上がると、ガードが書類を透明のケースに入れるように促した。

他に持っていない事を確かめてガードはスイッチを押す。

「！」

書類は静かに炎を立てて燃えていった。

車を走らせて帰路に着く。その間も視察の事で頭は一杯だ。

「ただいま」

「！ おかえりなさい」

妻のローラが迎える。2年前に彼女と結婚して僕の仕事もちゃんと理解してくれている。ブロンドのゆるやかで綺麗なカールを描く髪と海のような青い瞳。僕の一目惚れだ。

「え、出張？」

「うん、2日後に一週間ほどね」

ローラは少し寂しそうな顔をしたがすぐに笑顔を作る。

「気をつけてね」

「もちろんだよ」

言って彼女を抱きしめた。

視察に向かう前も向かっている今も、マークの心中は早く『キメラ』に会いたくてそわそわしていた。

一体、どんな少年なんだろう。いや、見た目はどうなのか解らないが成長速度は常人とほぼ同じだと記載されていたし、性別も男性とあるんだから……とマークは勝手に『少年』と位置づけた。

まだ9歳か……青年は目を細めて思いにふける。軍のジェットで数時間移動し、その後は軍用ヘリで施設に向かった。

施設に到着してからがまた大変だった。中に入るまでに色んなチエックを受け続ける。

「はあ……」

そりゃまあ機密事項だし貴重な存在がいるから理解はしているものの……と疲れてうなだれた頃、ようやく最終チエックも終了した。

「！」

そんなマークの前に50代半ばと思われる1人の男性が無表情に立つ。白衣を着ている処を見ると科学者の1人か。

「初めまして、マークです」

緊張しながら手を差し出した。

「ベルハース。よろしく」

「！」

この人が！？ マークは羨望の眼差しでベルハースを見つめた。
そんな彼にさして関心も示さずベルハースはさっさと歩き出す。

「あ……っ」

慌てて後を追うマークに老齢の男はぶっきらぼうに発した。

「君のような者が送られてくるとは、この研究所は店じまいかね？」
明らかに嫌味のこもった言葉にマークはムッとした。

「それでも僕は博士号を持っています」

「！ ほっ……」

*その名は悪魔か宝石

「そ、それであの。『N O ・ 6 6 6 6 』についてですが……」

「ベリルだよ」

「え？」

ベルハース教授は立ち止まりマークに言い聞かせるように再度、発する。

「ベリルだ。我々が名付けた」

「はあ」

彼が理解したと感じてまた歩き出す。

「『キメラ』でも良かったのだがね。俗物的な名前は気に入らない。やはりここはちゃんとした名前を付けるべきだ。そう思わんかね？」
笑いながら語った教授だがマークの意見を聞くつもりは無いらしい。

「……？」

ベリル、何故そんな名前を……？ 考えながら歩くマークにベルハース教授は少し嬉しそうに口を開いた。

「ちゃんとフルネームを付けてあげたのだよ」

「フルネーム……ですか？」

「ベリル・レジデントという。いい名だろう」

「！ それ、は……」

マークはすぐに理解した。

遺伝子を研究するうえで人の遺伝子に踏み込む時、人道的部分が他の生物より大きく問われる。キメラを造りあげた科学者たちにもそれが無いハズがない。

「……」

立ちすくむマークにベルハース教授は静かにこう言った。

「そうでない事を願うよ」

軽い音を立ててドアがスライドする。

「ベリル。元気にしているかね」

「はい」

「！」

あれがキメラ……言われなければ絶対に解らない。見た目はそこら辺にいる少年だ。金髪に明るい緑の瞳。

マークはベルハースに無表情な視線を向けている少年を見つめた。
「！」

そうか、それでベリル……マークは彼の瞳でようやく全てを理解した。

ベリルとは緑柱石から造られる宝石の総称だ。そして緑は悪魔の色とされレジデントとは居住者を意味する……科学者たちはこの2つをかけて『ベリル・レジデント』と名付けたのだ。

科学者にしては随分とウィットに富んだ名前を付けたじゃないか。マークは皮肉混じりに心の中でつぶやいた。

「自分たちのした事が正しかったのだ」と賞賛しょうさんされる日がいつか来るのだろうか。自責の念と科学者としての感情——そして人間としての想い。

そんなものが入り交じり『悪魔の器』という名前を作り上げた。

「どこも具合の悪い処は無いかな？」

「ありません」

「……」

確かに見た目はごく平凡な少年のようだが……マークはその雰囲気を目を見張った。9歳の少年とは思えない落ち着きと存在感。見つめられると動けなくなる。

「彼はマークだ」

そう言っただけベルハースは青年を示した。少年はやはり無表情にマークを見つめ青年の前に立つ。

「よ、よろしく」

「よろしくお願ひします」

嫌味のない丁寧な言葉遣い。少年は説明を受けなくても彼がどう
いう人物なのか知っているのだろう。そういう態度に感じられた。

しばらくベリルを眺めたあと、マークとベルハースは部屋をあと
にして会話を交わしながら通路を歩く。

「彼は自分の事を……？」

「もちろん知っている。3歳の時に話した」

「！ どうしてっ」

3歳の子供に『お前は造られた』と話したって言うのか！？ 驚
くマークに教授はしれつと応える。

「その方が実験はスムーズに進む。理解しない子供ほど厄介なもの
はない」

「！？」

これだから学者というもの……！ マークは教授を睨み付けた。
こういう人間に何を言っても仕方がない。彼は諦めるように小さ
く溜息を吐き出すと仕事に戻った。

「他に何かありますか？」

「特には無いな。感情の起伏があまり見られないが問題は無いだろ
う。あとは生殖能力が欠如しているくらいだ」

「！ 生殖能力の欠如？ 問題ないのですか？」

「その部分について彼を対象に研究は出来ないが、その他の部分に
ついては見ておわりの通り大成功だ」

ベルハースは言い聞かせるように右手を軽く揚げた。

「……」

マークは科学者が集まる部屋でベリルの部屋の監視カメラの画像
を見つめる。

「こうやって目の前で見てもまだ信じられない……」

青年の言葉に他の科学者が笑った。

「造った我々も9年たった今でもまだ実感が湧かないよ。何せ我々

とどこも変わらないのだからね」

それは『ほぼ完璧に成功した』という事を示すものだがその後が一向に成功しない。

偶然の産物なのか神のいたずらなのか……ベリルについて気になった事といえばあのしゃべり方だ。

とても9歳の子どもの言動とは思えない。落ち着き払った紳士的な言葉遣いと言えばいいのだろうか……寛大かつ尊大な口調なのだ。悪く言えばジジ臭い。

ベルハース教授が招いた言語学者が教えたそうだが、何故あのようになしゃべり方を教えたのか……その言語学者は心臓発作ですでに他界していて真相は掴めないままとなっていた。

今は他の言語学者が彼の教育に努めている。今更、変えようが無く問題は無いため放置する事となった。

*心とは

マークにとつての初めての視察を終え報告書を提出する。

「……」

それを無言で読む上司。一通り読み終え書類をデスクに置いた。

「君の見解はよく解った。当分、視察は君に任せよう」

「！ ありがとうございます」

部屋を出てマークは喜びに小さくガッツポーズを取り笑みをこぼす。

「やった！ やったぞ」

またキメラを見られる。彼の心は歓喜にうちふるえていた。

「……」

しかしふと思ひ起こす。

そういえば……キメラの名前を誰も知らないのだろうか？ 科学者たちは視察に来た人間に話していないのか？ ならば何故、僕にだけ……？

次の年——マークは「またキメラに会える！」と喜び勇んで飛行機に飛び乗った。軍のヘリの中でもニンマリしている。

そんな彼にいぶかしげな表情を浮かべる軍人たち。

「あんな施設、何が面白いのかね」

「学者の考えてる事はわからん」

あそこに何かがあるのか彼らでさえ知らされていない。

彼に会えるならこんな面倒なチェックなんてどうでもいい。マークはニヤける口元を必死に平静を装い長たらしいチェックに耐えた。慣れ親しんだ場所のように少年を探して施設内を歩き回る。

「あ！ ベリルはどこですか？」

前から歩いてくる科学者に聞いてみる。

「今はピアノのレッスンだよ」

「ありがとうございます」

マークは足早に向かった。

「！」

入ってきた人物に教師である女性が怪訝な表情を浮かべる。

「年に一度の視察ですよ」

ベリルは少しの笑顔で応えた。

「！へえ。じゃあ、また明日ね」

楽譜を持って女性が立ち上がる。マークの横を通り過ぎた時、小さく会釈した。女性の後ろ姿をしばらく見送り、楽譜を片付けているベリルに視線を移す。

「……」

そわそわしながらベリルに近づいた。10歳の少年に近づく態度ではない。外なら通報されている処だ。

「こんにちは」

マークが話しかける前にベリルが口を開いた。先に声をかけられ青年は一瞬、肩をビクリと強ばらせる。

「こ、こんにちは」

たどたどしく話しかけるマークにベリルはクスツと笑った。

「！」

笑った……感情の起伏が薄いとは聞いていたが無い訳じゃないから笑うのは当たり前だ。と青年は自分の思考に苦笑いを浮かべる。

「珍しいですよ」

「えっ！？」

「私という存在は」

言いながら部屋を出る。マークもつられるように後を追った。

「そ、そりゃあ、まあ……」

正直に答えたマークにベリルは歩きながら顔を少し後ろに向け再び笑いかけた。

「あなたはいいい人です」

「え？」

「今まで視察に来た人たちは私を人間として見ませんでした」

「！」

少年は歩みを止める事なく前を向き薄く笑って小さく発する。

「品種改良した犬や猫と大差ない」

「！ そっ……そんな訳、無いじゃないか」

マークは胸が締め付けられる思いがした。

人工的に造られた生命……それでも心は存在する。彼はまぎれもなく『人間』だ。この子を冷たい人間にしてはいけない！

「僕と友達になろう」

「え？」

突然の言葉にベリルはキョトンとした。少年のプライベートルームに戻り、青年は再び強い口調で発する。

「友達だよ。今から僕らは友達だ」

「……友達？」

マークは満面の笑顔で右手を差し出す。おずおずと差し出されたベリルの手をしっかりと掴み、左肩をポンと叩いた。

それからすぐに戦術の教官が来てベリルはトレーニングルームに向かう。

「……」

そのトレーニング風景を監視カメラで見つめるマーク。

少年を教える専門家たちはその正体を知らされていない。今日来たブルー教官にだけは真実を話すつもりだと科学者たちは言っていたが……

すると彼の真実を知る者は科学者たちの他は僕とブルー教官の2人だけという事になる。ならば僕は彼のために何かしなければならぬ。言葉だけの友達じゃない。本当の友達として……

マークは『視察』という役割を越えようとしていた。

* 思い出

「次の視察は来年だけど。何か欲しいものはあるかい？」
「……」

ベリルはしばらく考え込む。

僕は馬鹿な質問をしたかもしれない……と、マークは頭をポリポリかいた。パツと考えれば大抵の物は彼が希望すれば手に入るんだ。
「あの……」

「！ なんだい？」

ベリルは少年らしい笑顔でマークに応える。

「あなたの写真が見たいです」

「！ 僕のアルバム……？ そんなものでいいのかい？」
静かに頷いた。

「OK！ 今度持つてくるよ」

アルバム……何故だろう？ マークはへりに乗り込み施設をあとにした。

数日後――

「！ どうしたの？ あなた」

何かを必死に探していたマークに妻のローラが尋ねた。

「ん……僕のアルバムってどこだったかな」

「アルバムならこつちよ」

ローラはいぶかしげに案内する。

「ああ、あった。よかった」

「突然どうしたの？」

中身を確認しながらマークは嬉しそうに口を開いた。

「アルバムを見たいっていう友達がいてさ。探してたんだ」

「まあ、そうなの」

「！ そうだ、君のアルバムも見せていいかい？」

「私の？ 恥ずかしいわ」

「そんな事無いさ」

マークは言いながら彼女の額にキスをする。次の視察まで待ちきれなかった。

「！これが……？」

「ああ、そうだよ」

12歳になったベリルはマークが持ってきたアルバムを食い入るように見つめた。チェックの時に止められるかもしれない思ったが意外とあっさりOKが出た。

「……」

じつくりと眺めるベリルになんだか恥ずかしい気分になる。

「……楽しいかい？」

聞かれてベリルはマークに顔を向けた。

「ええ、とても」

その目は今までで一番輝いて見えた。こんな風に他人の写真を見る人なんていただろうか？ どうしてベリルは……？

「！？」

そうか……彼には家族はない。それ処か普通に生まれてすらない。照れた顔の自分を映してくれる相手などいないのだ。

「これはどういった時のものですか？」

「ああ、これはね」

「マークの奥様はとても綺麗な方ですね」

一緒に食事をするマークに嬉しそうにベリルは話しかけた。

「僕の一目惚れさ」

「だと思った」

いつもは食事のマナーを教える教師と2人で食事をするベリル。確かにマナーは完璧だ。12歳とは思えない上品さがある。

「……」

ふいに少年は食事の手を止めた。

「！ もういいのかい？」

ベリルは目を伏せて頭を横に振った。そして愁いを帯びた瞳で静かに発する。

「思い出……というものは良いですね」

「え？」

「それが良くも悪くも記憶に残る。私にももちろんあります」

「ベリル……」

「今までの『記録』を見せて欲しい。と言えば見せてはくれます。しかしそれは思い出とは言い難い」

「……」

マークは何も言えなかった。

「思い出はいつも同じ背景です」

そうしてベリルは困ったような笑顔を見せる。

それは……自分の運命を受け入れた笑みだ……

「……」

視察を終えて家のベッドで考え込むマーク。

「あの顔、自分の境遇に悲観してるモノでもない……ただ自分なりに受け入れた。というだけなんだ」

彼は彼なりに自分の出来る範囲の中で人生を楽しもうとしている。遺伝子を学んだ者として初めは好奇心が先走っていたマークだが現実に直面し、いかに己の考えが愚かだったのか気付いた。

人道的なんてレベルじゃない。

「普通の遺伝子研究してた学生時代の方がはるかに楽しかったよ……」
本物の人間の遺伝子を使った実験。成功した結果がこれだ。

「そりゃ考えた事はあったさ。でも想像と現実は……全然違う」

ベリルはもう『成功例』なんかじゃない。

「僕の……友達だ」

* 砕かれた宝石

ベリルが14歳になった頃――マークと彼はすでにうち解け合った仲となっていた。視察としては逸脱した事だが、彼は『中』と『外』を上手く使い分けた。

「教授」

「なんだね？」

コーヒーを傾けるベルハース教授にマークは静かに問いかける。

「どうして僕に彼の名を……？」

今まで質問するチャンスが無かったがようやく聞く事が出来た。

「……」

しばらく沈黙していた教授が低く発する。

「『賭け』だよ」

「賭け？」

ベルハースは監視カメラを一瞥したあと小さく溜息を吐き出した。

「あの子は死ぬまでここを出られない」

「！」

「我々は彼が生まれた瞬間、歓喜した。そしてその後の事を考えた」

「教授……」

「人間で言えば感受性の強くなる年頃だ。友達もいないのでは……
相手は誰でもいい訳ではない」

そう言つて教授はコーヒーを一口味わいマークを見据える。

「我々は君に賭けたんだ」

「ありがとうございます」

マークは目を細めた。

さらに1年が経ち――15歳になった彼は落ち着き払った仙人のような貫禄を見せる。

「ベリル！」

向こうから歩いてくるベリルにマークは笑って手を振った。ベリルもそれに手を挙げて応える。

「元気だったかい？」

「マークも」

見上げる少年にマークはニコリと微笑んだ。彼はブルーと会い話し合っていた。

「彼の真実を知る我々だけは彼の友でいよう」と……

ベリルは誰も憎んでいない。僕なら生み出した科学者たちを憎んでいたかもしれない。

だが、彼は逆だった。

「憎む？ 何故」

「何故って……生まれなかったらこんな処に閉じこめられなくても済んだのに」

「それは違う。彼らがいなければ私はここには存在していなかった。あなたとも出会わずにいた。この記憶も無い」

君は強いね。僕は君を生み出した科学者たちに少し憎しみを抱いていたのに、君はそれをあっさりと消し去った。

「ただ……」

ベリルは少し視線を落として薄く笑い付け加える。

「私の持っている知識は意味がない。という事は少々悲しい」「！」

どれだけ学ぼうともそれを活かせる場所はない。だが彼は学ばなければならぬ。それが彼に与えられた『仕事』なのだ。

「学ぶ事自体はとても楽しいけれど。時折、虚しくなる事もあります」

次は彼と何を語ろう。マークは帰りのヘリの中で次の視察の事を考えた。

年に1度だけ会える友人。それもいつまで続くのか解らない。上が別の視察を選ぶ時が来るかもしれない……そう思うとマークは怖

かった。

彼をまた実験動物のような目で見る人間が送られるのは我慢ならない。だけど、それに抗う術^{すべ}を僕は持たない。ずっと僕が視察で有り続けたい……神様に祈りたい気分だ。

そんな事があつた数週間後――

「なんですって!？」

マークは静かに腰掛けている上司に声を張り上げた。

「早く救助に……!」

その言葉に上司はピクリと反応した。

「国家機密だ。簡単に軍は出せない」

「見殺しにするおつもりですか!？」

「そんなつもりは無い!」

「……っ」

語気を荒げた上司にマークは喉を詰まらせた。

「くそ……っ」

マークは上司の向かいの部屋で動向を見守る事にした。

遺伝子研究所が襲撃を受けているなんて! どの犯罪組織なんだ? あの研究施設は彼らにとって有益になるようなものじゃないのに! まさか生物兵器かなんかと勘違いしてるんじゃないだろうな。

「いつになったら軍は動くんだ!」

マークはイラついた。襲撃を受けたのは一昨日だと言っじゃないか。

「もう手遅れだ。ベリル……」

第2章　懐かしき声と心の傷

「ベリル！」

マークはようやく救援に向かった軍のヘリに同行した。

「どこだ！？　返事をしてくれっ」

マークは必死に探し回る。

「ベリ……ル」

まさか奴らに連れ去られたのか？　彼はモルモットにされるのか？　そんな事、許さない。荒い息を整えながら宙を睨み付けた。

まだ肌寒いこの季節、放置されていた遺体はあまり腐蝕していない。広い敷地を見回ったがベリルの遺体は無かった。

「やっぱり……連れて行かれたんだろうか」

マークはそんな考えを振り払うように激しく頭を振った。

「！」

ふと遺体の横に……

「花？」

しおれた小さな花が遺体の横に置かれていた。襲撃に来た奴らの服にでも付いていたのだろうか……？

「？」

それをそつと手にとって他の遺体を見る。

「！」

他の遺体にも目立たないが同じような花が添えられていた。

「まさ……か！」

マークは再び走り出した。

数十分後――

「はあ、はあ、は……っ」

走り回るマークに兵士たちは怪訝な表情を浮かべる。さすがに走りすぎて疲れたのかマークは通路の壁に右肘を付いて大きく溜息を

吐き出した。

「ふ、ははは……」

そして笑い出す。笑いながら歩き出し外に出た。森に囲まれた施設、晴れた空がマークを迎える。涼やかな風を全身に受けマークはへたり込んだ。

「！」

その隣にあの花があった。

「ベリル……生きてるんだな。逃げ延びたんだな」

小さな花を手にとつてマークは確信した声になる。全ての遺体に花が添えられてあつた。襲撃した奴らがそんな事をするハズがない。誰がやったか？ 決まってる。ベリルだ。

「フ、はは……あはははっ」

マークは嬉しくて草原に体を投げ出した。そしてゆっくりと立ち上がる。

「そうだ、それでいい」

僕たちの事なんか待たなくていいんだ。君は自分のしたい事をすればいい。僕は信じてるから……君ならばきっとその知識を正しい事に使ってくれると。

ベルハース教授。あなたたちは素晴らしいよ。自分たちが犠牲になるかもしれない予測まで立ててベリルの名前を伏せていたなんてマークはいつまでも笑いが止まらなかった。

「ここは大きな家族だったんだ……」

ベリルの家族だったんだ。だから彼は花を添えて旅だった。

僕は決して君の名を報告しないよ。君はようやくはばたく事が出来たのだから。それを見届ける事は出来なかったけれど満足してるよ。

君の足で歩き君を生み出したこの世界をその目で見てくれ。君の存在が善か悪かなんて僕たちが決める事じゃあない。

「ベリル……元気でな」

マークは澄み渡る青空を見上げてつぶやいた。

*その記憶

あれから30年——マークはあのあと別の仕事に就き、今は仕事も辞めて妻と郊外で静かに暮らしている。

「……」

マークはリビングの窓からレースのカーテン越しに外を眺めたあと溜息を吐いてソファに腰掛けた。

国の仕事を辞めて30年……ようやく僕の監視は解かれたらしい。確かに、あの時の僕の言動は周りから見てもおかしかったと思う。

「あの襲撃に関わっていたかもしれない」という考えになっても当然だろう。

窓の外で小鳥がさえずる。マークはその可愛い鳴き声を楽しんでいた。

「あら、どなた？」

玄関の方から妻の音がする。客か。

「ご主人はいらっしゃいますか？」

聞き慣れない青年の声だ。僕の知り合い？

「ええ、リビングにいるわ」

「お邪魔させてもらっても？」

「どうぞ。私はこれから買い物だからゆっくりしてってね」

「ありがとうございます」

「！」

おいおい、僕を1人にするのかいローラ。僕はその客の声に聞き覚えは無いんだけど……と思いながら静かに目を閉じて小鳥のさえずりに聞き入った。

落ち着いた足音が近づいてくる。マークはゆっくりと目を開きリビングの入り口まで気配が近づいてきた処でそちらに目を向けた。

「……！ ま、さか……そんな」

マークはその姿に思わず立ち上がる。

「お久しぶりです」

柔らかな笑顔でその青年はマークに口を開いた。

「そんな……馬鹿な」

フラフラと立ち上がり青年に近づく。金髪のショートヘア、エメラルド色の瞳。

その顔立ちはまさに……

「ベリル？ 本当に？」

無言で頷く青年にマークは首を横に振った。

「いや、そんなハズはない。生きていたとしてももう45歳のハズだ……それとも君は彼の息子か？」

どう見ても25歳の青年に震えた指を差し示す。

「いや……彼は子供は作れないハズだ。」

「クローンか？」

「私ですよ、マーク」

そうだこの声。マークは30年前の記憶を呼び覚ます。
しかし……

「成長速度は常人と同じハズだ」

いつまでも落ち着かないマークに青年はクスツと笑いをこぼした。

「！ その笑い方、ベリル！」

青年にしがみつく。ベリルはなだめるようにマークをソファに促した。

「話せば長くなるのですがちょっとした事から不死になってね」

苦笑いを浮かべて話を切り出した。

「なんだって？」

マークは自分の耳を疑った。

「今、なんと言った……？」

「信じられないかもしれませんが不老不死になったんですよ」

「冗談もほどほどに……」

いやしかし、目の前に現に青年のベリルがいるじゃないか。これは信じがたい事実だ。

ようやく信じたマークにベリルは再び笑いかける。青年はブランドーのボトルをマークに示してテーブルに乗せた。

「随分と高そうなブランドーじゃないか」

「お世話になった礼です」

言って向かいのソファに腰掛ける。それにマークは笑いをこぼした。

「僕は何もしていないよ」

言った言葉にベリルは静かに首を横に振った。

「私の名を報告しなかった。だから私は今まで自由でいられた」

「！ そんな事が。友人なんだから当り前だろ」

マークは立ち上がりグラスを用意する。

それを見たベリルはボトルの栓を抜いた。グラスに琥珀色の液体が注がれる。

「！」

本当に高級品だ……マークはその色と香りに顔がほころぶ。

「話してくれ。今までの事を」

「そうですね……何から話せばいいのか」

マークはベリルの話に聞き入る。信じられない内容に驚き、時には笑いを挟みながら。

「ふうむ、不死を与える力を持った者……そんな人間がいたとは」

「それを使えるのは1度だけらしくてね。今はただの人間だよ」

「まさか逃げた後に傭兵をしているとは思わなかったよ」

「私にはそれが適正だったらしい」

「……」

ブランドーを傾けるベリルを見つめるマーク。

こんな時間が与えられようとは……マークは神に感謝しなくなった。

「！ おい、もしかして」

「ん？」

「我が国からも君に要請が来たり。するのか……？」

その問いかけに、ベリルはニヤリと口の端をつり上げてグラスを軽く掲げた。

「プッククク……そうか」

マークは頭を抱えて笑った。

*翼

「じゃ、じゃあ彼らは自分たちの造りだした人間に依頼しているって訳か？ こいつぁ笑える！」

マークはヒュヒュと咳き込みながら大爆笑した。それにベリルも笑いを浮かべる。マークはひとしきり笑うと視線を落とした。

「！」

「君が無事で……本当に良かった」

ベリルは困った顔をして苦笑いで発する。

「今の方が大変ですよ」

「大変？」

「何せ『不死』ですから。何度捕まったか知れない」

「！ ああ、それなら僕も調べてみたい」

「冗談でしょう？」

「半分、本気だ」

「言ってくれる」

「ああそうだ」

「？」

マークは思い出したようにつぶやくとメモに何か書き始めた。それをベリルに手渡す。

「……墓地？」

「彼らに会いたいだろう？」

「！」

一瞬ベリルの表情が曇る。

「本当はもっと早くあなたに会いたかったのですが」

「監視が邪魔だったろ」

「ええ。やっといなくなっただけでようやく会う事が出来ました」

「30年……か。長かったな」

「そう、長かった」

2人はしばらく沈黙した。互いの視線を交わしそれだけで30年という長い時間を縮めた。

「恋人はいるのかい？」

「！ 恋人？ いません」

「なんだ、恋人の1人もいないのか」

「興味が無くて」

ベリルは苦笑いを返す。

「君らしいよ」

青年はグラスをテーブルに寄せ静かに立ち上がった。

「！ 行くのか」

「ええ。会えてよかった」

言って上着のポケットから小さな箱を取り出した。

「奥様に」

「！ ありがとう」

「ネックレスです」

箱の名前を見る。

「これ、かなり高級なやつなんじゃ……」

「独り身だとお金の使いどころが無いんですよ。こついつ時にドカッと使わせてもらいました」

笑って言ったベリルにマークは照れながらポケットにしまいこんだ。

ベリルを玄関まで送る。

「また来ます」

「元気だな」

「あら、もうお帰りになるの？」

ローラが買い物から帰ってきた。ベリルは彼女に笑いかける。

「！ そうだローラ。彼から君にプレゼントだよ」

彼女が持っている荷物を受け取り箱を手渡した。

「まあ！ ありがとう」

「それではお元気で」

「また来てちょうだいね。今度は夕食でもごちそうしますわ」

「ありがとうございます。是非」

「元気でな」

「貴方も」

マークは彼の後ろ姿をいつまでも見送った。

見送ったあと荷物をキッチンのテーブルに置きリビングに向かう。
テーブルの上にあるベリルが持ってきたボトルに目を向けた。

「……」

ゆっくりと歩み寄りボトルを両手で握りしめてうずくまる。

「ベリル……よかった」

マークは静かに涙を流した。ずっと心に消えないしこりのように
彼を苦しめていた過去がようやく解き放たれた。

これで悔いはない。僕は、はばたく翼をこの目でたったい見た
のだから……マークはいつまでも琥珀色の液体が揺れるボトルを握
りしめた。

最終章

マークと別れたあとベリルはメモに記された場所を訪れる。広大な敷地にぽつんと一角だけ他とは違う雰囲気 of 墓石が建ち並んでいた。

「……」

死んだ場所も年月も記されておらず。ただ名前だけが墓石に刻まれていた。

「ブルー……」

ベリルは建ち並ぶ墓石に目を細める。

涙は出なかった。代わりに胸が締め付けられる。

「……っ」

はき出せない苦しみにベリルは胸を強く握んだ。微かに震える体は今にも崩れそうに弱しく立ちつくす。

私がいなければ彼らは死ぬ事は無かったのだろうか。

過ぎ去った過去を悔いる事は簡単だ。だが……それが彼らの望む事なのか？ 彼らはベリルを逃がすために自らの命を犠牲にした。

ブルー教官はベリルを『人類の理想』と言った。

いがみ合い争い合う人類は彼の中で1つになっている。それは科学者たちの儚い夢だったのかもしれない。

『人種などどうでもいいじゃないか』

ベルハース教授の笑い声が聞こえてくるようだった。

『見るがいい。何の不具合も無く、全ての人種のDNAがここにまとまっているだろう？』

科学者たちが笑う。

「……」

ベリルは一度、目を閉じて墓地をあとにした。
振り返らずに前を見据えて――

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4418r/>

はばたく翼

2011年8月30日03時24分発行